豊かな人間性をはぐくむ学級経営の実践

～言語活動を要とした学級の指導～

A8G31006 清水香保里

指導教員 平澤 茂

1 研究の目的と意義

近年の子どもたちは、自分の気持ちや思いをうまく表現できなかつたり、相手の思いを受け止められなかつたり、友達との人間関係づくりが難しい事情を抱えている。

そこで、学校生活の中心となる学級で、子どもたちの言語活動を充実させることを手立てとして、豊かな人間性をはぐくむ学級経営を実践していくことが急務であると考えた。

そもそも豊かな人間性とは、平成8年7月の中央教育審議会答申で「生きる力」の1つとして掲げられた。すなわち、豊かな人間性とは、「自ら律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など」である。

それは、人としてよりよく生きる心、自己を知り他者を知って尊重する心、すなわち、自己理解しつつ他者理解することではぐくまれると考える。自己を理解し、自己の長所や短所など自己の全てをメタ認知できれば、他者も理解できるのではないか。そして、自己理解と他者理解を相互に連続的、発展的に行い続けることによって、豊かな人間性をはぐくまれていくのではないかと考えた。

なぜなら、人は自分一人だけでは自己を理解することは難しい。自分を他人と比べることで、初めて他人と違った自分が分かるのである。だから、自己を他者のように客観視することができれば、自己を理解することができると思う。

他者理解が、より深く効果的にできる場合は学級である。学級経営がうまく実践されていれば、規律があつて、連帯感に包まれた集団が形成される。豊かな人間性をはぐくむためには学級経営は大切な環境であり、学級担任の果たす役割は大きいといえる。

その手段として、言語活動は心を豊かにすることに効果的であると捉え、言語活動を要とした方策を検討することを目的とする。

2 研究の方法

(1) 学習指導要領、文献等を用いた考察

- ・豊かな人間性の意味づけ（豊かな人間性の意義、自己理解と他者理解）
- ・学級経営の概念（成立と展開、学習指導と学級経営、学級担任と学級経営）

- ・言語活動の意義（言語活動の必要性、言語活動と道徳教育、言語活動と学級経営）
- (2) 言語活動を要とした学習指導実践の考察
- ・授業分析の方法（分節分け、エスノグラフィー）
 - ・実践事例の授業分析（国語、生活、総合的な学習の時間、道徳）
 - ・実践事例の考察（発問と言葉がけ、フランダースと岡山教育センターの分析）
- (3) 授業分析による自己の実践

3 これまでの研究の経過と結果

1年次の中間報告会では、授業分析を行うことで、教師の言葉がけに対する児童の反応について分析してきた。その結果、教師の発問や言葉がけが、授業の流れと児童の発言の深まりに大きく関与していることが伺えた。

すなわち、教師が児童の発言を「受容」することで、児童は安堵し、自分の考えが間違っていないことを確認して自信をもつことができる。つまり、自己肯定感が高まると言える。そして、教師がさらに児童の発言を「整理」した言葉がけをすることによって、児童は自己をメタ認知した発言ができる。

G・H・ミードは、「人は自分自身が話しているのを聞くときには、常に、同じ言葉を他者からかけられたとき、自分ならどういう態度をとるだろうかということを、ある程度、考えているものである。」^{*}と、自己内対話の意識を示している。

そこで、「受容」「整理」の言葉がけを教師が繰り返すことによって児童は、発言に自信をもつことができ、自分の考えを相手に伝えやすくなる。そうして、互いに考えをやりとりすることで学びが深まり、豊かな人間性がはぐくまれるのではないかと考えた。

4 今後の課題

1年次は、教師の発問と言葉がけについて主に分類し考察したが、2年次は、授業（国語、道徳、生活）と授業外活動（朝の会、帰りの会など）を含めた学級経営の中で、「読むこと」「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「話し合い活動」等の言語活動を実践し、豊かな人間性を検証し、研究をまとめていく。

^{*} G・H・ミード/船津衛・徳川直人編訳『社会的自我』恒星社厚生閣、1991年、P8